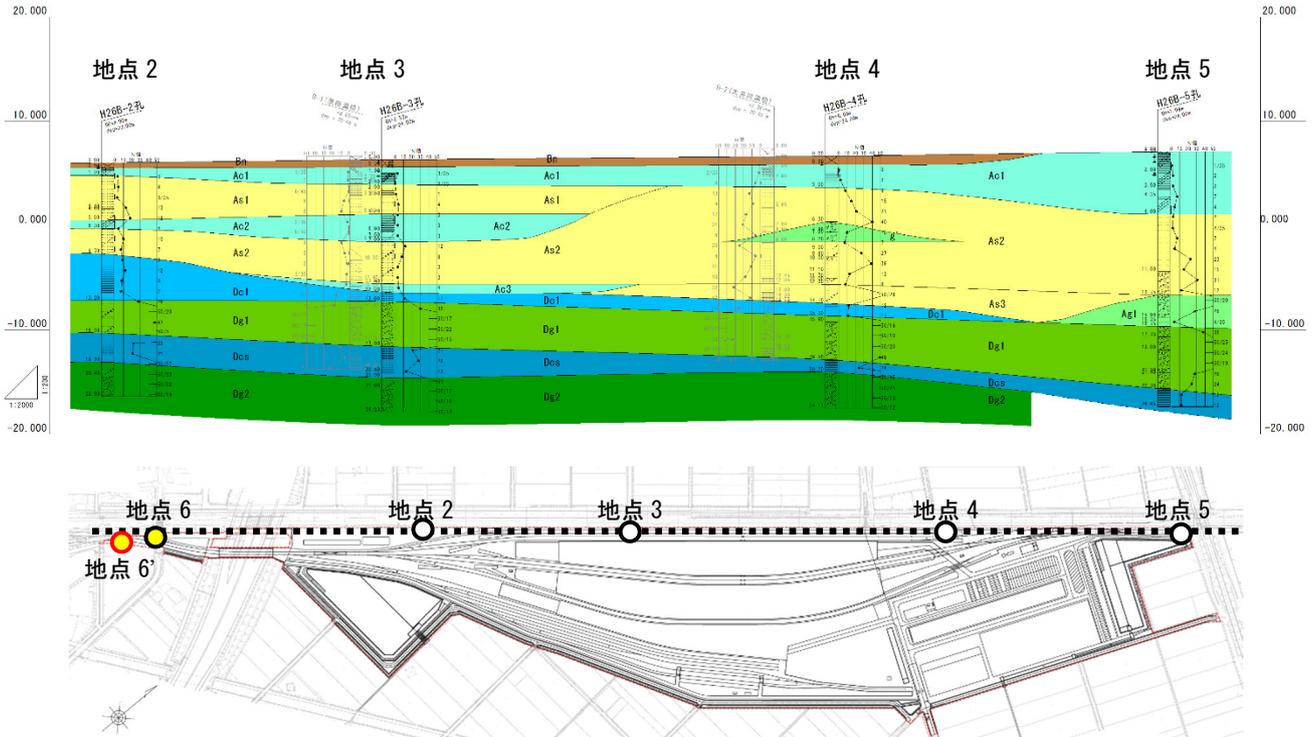


(1) 地点6と地点6'の地質について

計画地及びその周辺は、平坦な農地となっており、地質調査の結果、土層構成は概ね同様である。特に、地下水位の存在する表層5m程度までは、粘性土と砂質土で構成されており、地点2から約290～330m離れている地点6及び地点6'についても同様の土層構成となっているものと想定される。



参考図1. 土層断面図（環境影響評価書の図に地点6等を追加）

参考表1. 地質層序表（環境影響評価書より抜粋）

土質記号	土層名	主な土質名	確認層厚 (分布範囲)	実測N値 (平均N値)	土層の特徴
Bn	盛土・表土	砂質シルト	0.50～1.00m (JR併走区間)	—	畦畔や道路盛土などで、砂を混在する粘性土。
Ac1	沖積 第1粘性土層	砂質粘土 シルト質粘土	0.70～6.00m (全域 表層)	0～7 (2.1)	一部、有機質粘土など、全体に有機物を混入する軟らかい粘性土。
As1	沖積 第1砂質土層	細砂～中砂 礫混じり砂	1.30～4.30m (全域 As1下)	2～18 (6.8)	シルトを混入し、N値のバラツキが大きく、上部粘性土層との境界部は緩い縮まり。
Ac2	沖積 第2粘性土層	シルト 砂質シルト	0.80～4.10m (併走区間西側)	0～4 (2.4)	炭化した有機物などを混入し、一部は砂質土との互層。
As2	沖積 第2砂質土層	細～粗砂 シルト混じり砂	2.40～8.30m (全域 中央深度)	2～40 (12.0)	細～中砂が主体で、垂円礫を10～20%混入。上・下の粘性土層との境界や粘性土挟在箇所N値が小さい。
Ac3	沖積 第3粘性土層	砂混じりシルト	0.40～1.60m (併走区間 中央)	3～4 (3.5)	砂分を混入。
As3	沖積 第3砂質土層	礫混じり砂	0.95～1.80m (併走区間 中央)	32～50以上 (45.0)	細～中砂が主体で、φ5～10mmの垂円礫を10～20%混入。
Ag1	沖積 砂礫層	砂礫	2.15m (北東端のみ)	28～50以上 (51.5)	φ10～30mmの垂円礫を10～60%混入。礫量のバラツキが大きい。
Dc1	洪積 粘性土層	固結シルト	0.90～4.50m (主に南西側)	7～17 (11.2)	含水量が少なく、一部は半固結状を呈す。
Dg1	洪積 第1砂礫層	砂礫 礫混じり砂	3.30～4.65m (全域)	26～50以上 (77.4)	φ5～20mmの垂角礫を50～80%混入。礫量のバラツキが大きい。最大礫は100mmの短棒状で採取。
Dcs	洪積 粘性土・砂互層	砂混じりシルト 礫混じり砂	1.20～4.10m (全域)	5～34 (21.0)	含水量が少なく、一部は半固結状を呈す。砂・砂質土層との互層箇所があり、N値のバラツキが大きい。
Dg2	洪積 第2砂礫層	砂礫	3.30m (全域)	50以上 (89.6)	φ5～20mmの垂角礫を50～70%混入。深度方向の礫量のバラツキが大きい。最大礫は50mmの短棒状で採取。

(2) 地下水位の状況について

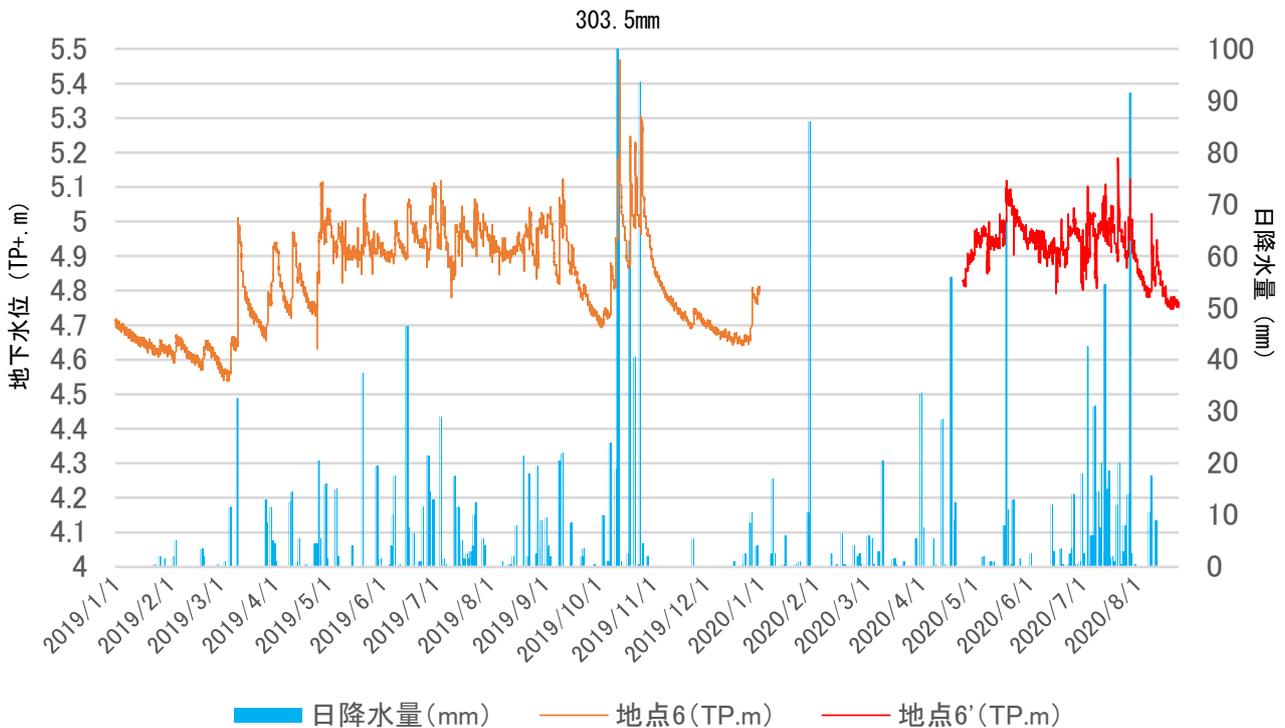
地点6の2019年の1年間の観測結果と地点6'の2020年4月25日～8月24日の4ヶ月間の観測結果は参考表2のとおりである。

地点6と地点6'は、観測期間が重複していないため、単純に比較することはできないが、平均水位や最低水位は概ね同程度となっている。なお、2019年の最高水位は、台風19号の降雨により日降水量が303.5mmとなった日の記録である。

参考表2. 地下水位の観測結果概要

水位	地点6 (孔口標高：TP+6.23m)	地点6' (孔口標高：TP+5.25m)	(参考) 地点6の4/25～8/24
測定期間平均水位	4.82 m	4.92 m	4.95 m
測定期間最高水位	5.47 m	5.18 m	5.12 m
測定期間最低水位	4.54 m	4.75 m	4.63 m

※地点6は2019年の1年間（【参考】は2019年の4/25～8/24）、地点6'は観測を開始直後の2020年4月25日～8月24日の観測結果を示す。



参考図2. 地点6と地点6'の地下水位（地点6：2019年、地点6'：2020年4月25日～8月24日）